

光村図書の学習指導書

豊かな授業づくりの一助となり
たい——そのような思いから、
光村図書『中学校美術 学習指導書』
はつくられています。

学習指導案や実践事例が豊富に掲載された「本冊」をはじめ、教科書の紙面を生かしながら題材の趣旨や授業のポイントなどを示した「別冊朱書き編」、鑑賞用作品図版などの「掲示用掛図」、コピーして配布可能な「ワークシート」、制作に役立つ映像資料などが収録されたCD-ROM、そして、教科書の題材「感じたことを話し合おう」「発想・構想を広げるために」に沿った映像資料を収録したDVD-ROM……と、充実した内容となっております。

特に、DVD-ROMには、銅版画家・山本容子さん、アーティスト・日比野克彦さん、工業デザイナー・川崎和男さんのインタビュー映像や、実際の制作風景を撮りおろして紹介しています。ぜひ、明日の授業にお役立っていただければと思います。



本冊には学習指導案などを掲載。生徒作品の写真を紹介しながら、指導内容をわかりやすく伝えている。



DVD-ROMに収録されている日比野克彦さんのインタビュー映像。共同制作への思いを語っている。

学習指導書 1, 2・3上, 2・3下 各1冊
本体価格各25,000+税

- CD-ROMとDVD-ROMは、学習指導書『美術1』に付きますが、内容は3学年に対応しています。
- 購入される場合は、お手数ですが最寄りの特約供給所にご連絡をお願いいたします。

教科書訂正のお知らせ

平成25年度版教科書『美術2・3下』では、平成24年度版から下記の箇所を訂正いたします。校内の先生方でご確認のうえ、ご指導の際には、十分ご留意くださいますようお願い申し上げます。

P26 図版キャプション
(24年度) (25年度)
車椅子スロープ スロープ

美術準備室 No.3

2013(平成25)年4月30日

発行人 ■ 常田 寛
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話: 03-3493-2111
http://www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days(大久保裕文+武井系子)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社

特集

伝統の美から学ぶ

アトリエ訪問
イラストレーター・絵本作家

坂崎千春

作家の肖像

美術家

李 禹煥

子どもの世界をとらえる

「将来を想像する自分」

放課後ART

● 香川大学教育学部附属

高松中学校

● wah document

この1点

「自画像」田口ランディ



坂崎千春

イラストレーター・絵本作家

Suicaのペンギン (JR東日本)や、チーバくん (千葉県のマスコット)、クウネルくん (雑誌『ku:nel』)などを生み出した、イラストレーター・坂崎千春。ほのぼのとしたキャラクターをつくる彼女のアトリエは、意外にも都心の高層マンションにあった。

撮影 永野雅子

玄関に入るとすぐ、大きなペンギンの置物が目に入る。「知人が作ってくれたものなんです。Suicaのペンギンを手がけてからというもの、ペンギンのグッズをもらうことが、本当に多くなって」。部屋に一歩足を踏み入ると、あちらこちらに置かれたかわいらしいペンギンが、我々を出迎えてくれた。

——こちらにアトリエを構えて、どのくらいになるのでしょうか。

坂崎 今年で10年目ですね。以前は自宅も兼ねていたのですが、今は完全に仕事場として使っています。キャラクターの制作をしていると、グッズやサンプルをたくさんいただくので、手狭になってしまって。キャラクターグッズに追われるように(笑)、自宅は別の場所へ移しました。——うさぎと猫を飼われているそうですね。

坂崎 ええ。動物が好きなんです。子どもの頃は『ドリトル先生』『エ

ルマーのぼうけん』など、動物が出てくる物語をよく読んでいました。スヌーピーのコミックも大好きでしたね。でも、スヌーピーが好きというより、その世界観やストーリーに強く惹かれていました。実を言うと私、昔からキャラクターそのものにはあまり興味がないんです(笑)。

——そうなんですか。意外ですね。

坂崎 だから、自分がこんなにキャラクターをつくるようになるとは、夢にも思いませんでした。もともと絵本が好きで、大好きな動物であるペンギンを主人公にして、絵本をかいていたんです。その本が広告代理店の方の目に留まり、JR東日本のICカード普及のキャンペーンのために使われることになりました。

絵本のペンギンは、顔が小さくシャープで、横向きのポーズがほとんどです。当初、Suicaにもそのペンギンが使われていたのですが、より多くの人たちに愛されるようにと、2003年頃から体をプリッと太らせ、顔を大きくしました。また、キャラクターとしてインパクトをもたせるために、黒い丸顔に目と口だけがある、アイコンのような「正面顔」をつくりました。このあたりから、ペンギンの認知度がぐんと上がったように思

います。

——教科書(『美術2・3上』P32)では、「暮らしの中のキャラクター」と題し、Suicaのペンギンなど坂崎さんのお仕事を紹介しています。

坂崎 キャラクター制作は、私にとって「好きなこと」というより「得意なこと」という感じです。だから、キャラクターをつくるときは、職人のような気分なんです。

「神は細部に宿る」という言葉がありますよね。制作中は、いつもその言葉が頭をよぎります。例えば、ペンギンの輪郭には、温かみのあるブルブルと震えたような線を使うの



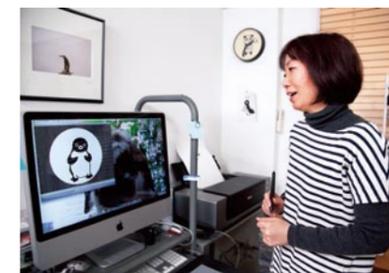
書棚にも、ペンギンのマトリョーシカなど、動物の置物や小物がずらりと並ぶ。

ですが、その細かい「ブルブル」を、納得のいくまで微妙に変えたりします。私以外は誰も気づかないようなことかもしれないけど、そういう細部にも手を抜かず、こだわっていきたい。

この机に向かっているときが、いちばん集中できるし、落ち着きます。昔はキャラクターグッズがあまりなかったもので、もっとすっきりした仕事場だったんですよ。でも、こういう物がたくさんある状態でも仕事に集中できるようになってしまったので、最近はこのままでいいかな、なんて思い始めています(笑)。



2012年秋に長野新幹線と上越新幹線の車体ラッピングに使われたイラストの原画。



「自分でペンギンに動きをつけてみたい」と話す坂崎さん。試作品をMacで見せてくれた。



さかざき・ちはる
東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。
ステーションリーメーカーのデザイナーを経て、
1998年よりフリーのイラストレーター・
絵本作家として活動を始める。
2001年、Suicaのペンギンのキャラクターデザインを
きっかけに、多くのキャラクター制作を手がける。
『ペンギンゴコロ』(文溪堂)、
『うさぎのピンゴ』(角川書店)など著書多数。

オリジナルの文様で 手ぬぐいをつくろう!

東京都大田区立
南六郷中学校

佐藤真理子先生 × 1年3組 (生徒数 35名)

第 1 時

文様を知ろう

「みんなは、この図柄を見たことがありますか」

唐草の文様がプリントされたパネルを掲げて、佐藤先生はそう投げかけた。「知ってる! 獅子舞だ」「風呂敷でしょ」「泥棒が持っているやつ!」と、生徒たちは身を乗り出して答える。「そうだね。風呂敷の図柄として目にすることが多いですね。では、この図柄は何をもとに考えられていると思う?」と尋ねると、「雲かな」「風だと思う」「葉っぱじゃないかな」と、さまざまな意見が出された。

「実は、蔓草をイメージしているんです」と先生は答え、その後も青海波の文様や、麻の葉の文様のパネルを示して、同様に生徒へ問いかけていった。

「これらは、『文様』と呼ばれるものです。古くから生活用品や衣服などの身近なものに、飾りとして使われてきた図柄です。文様は、みんなの身の回りにもきっとあるはずだから、家で探してみてね。では、教科書を開いてみましょう」。先生はそう話し、教科書(『美術1』)P32の「文様、飾りの小宇宙」を見せた。そして、文様は日本だけでなく、世界各国にもあることを説明し、今回の授業では、オリジナルの文様をつくることを告げた。



「『唐草文』は、蔓草がどんどん伸びて成長することから、長寿や子孫繁栄の願いが込められています」と説明。

その後、自作のプリントを配布し、さらに詳しく文様について説明していく。例えば「青海波文」。波をモチーフにしたこの文様は、波は永遠に繰り返され訪れることから、よいことが繰り返されて繁栄するよという願いが込められている。「文様には人々の願いが込められています。みんなにも、自分の願いを込めた文様を考えてもらおうよ。そして、手ぬぐいをつくってもらいます」。そう言いながら、先生は用意してきた手ぬぐいを広げて見せた。そして、手ぬぐいには文様が入ったものが多いことや、その歴史や用途などについても簡単に説明をした。

「オリジナルの文様を考えたら、ゴム板に彫ってスタンプをつくりま。それにインクを付けて、手ぬぐ



教科書とプリントを見ながら、文様の種類やそれぞれの文様に込められた願いを学ぶ。

いに押ししていきます。今日はまず、自分の願いを込めた文様のアイデアを練っていきましょう。

「どうしようかな」「うーん、迷うなあ」。生徒たちは、友達と相談しながら、ワークシートにアイデアをかき出していった。

特集

伝統の美から 学ぶ

美術文化への理解を深めることが、学習指導要項の教科目標として新たに加わり、美術を通して自国の伝統や文化を理解することが求められています。本特集では、佐藤真理子先生の「文様をつくる」という、デザインの授業をご紹介します。生徒たちは、日本の伝統的な文様をどう捉え、どのようなオリジナルの文様を考えていくのでしょうか。

撮影 鈴木俊介

文様のアイデアを練ろう

先生は冒頭で次のように切り出した。「前の時間に、文様はみんなの身の回りにもあるはずだから探してみてねって言いました。早速、Sさんが見つめてきてくれたよ。そう話し、「麻の葉文」がプリントされたSさんの巾着を見せた。

他の生徒からも「茶道を習っている母の袱紗に文様を見つけた」「うちの座布団に文様があった」と発表があり、昔から伝わる文様が、今でも使われ、親しまれていることを、みんなで確認することができた。

そして、文様のアイデアスケッチに移る。「文様に『どんな願いや思いを込めるか』ということが、いちばん大事です。いきなり図柄をデザインするのではなく、まず自分の願いを言葉で書き出して、そ

れから図柄を考えようね。先生がそう伝えと、生徒たちは、「部活の試合で勝てますように」「友達がたくさんできますように」など、さまざまな願いをワークシートに書き出し、文様のアイデアを練っていく。

「野球がうまくなりたい」という願いを込めて、野球ボールの文様を描いている生徒に対しては、「ただボールを文様にするのはなく、もっと自分らしい特徴を入れよう。ボールの周りに自分の願いを表すような模様を入れるなど、工夫できるはずだよ」と、自分の願いを考えながらオリジナリティを出すように伝えた。なかなか願いが思いつかず、文様を考えられない生徒もいる。先生は「成し遂げたいことや、将来の夢をまず言葉で書いてごらん」と一人一人に声をかけ、丁寧に机間指導をしていく。文様と考えられた生徒には、長方形の手ぬぐい



前時で見た「麻の葉文」のパネルと、Sさんの巾着を並べて見せる。



ワークシートに自分の願いを言葉で書き出し、文様のアイデアを練っていく。

どのように押していくのか、レイアウトについても考えるよう促した。

次時から、いよいよゴム板を彫るなどの実作業に入っていく。

文様を彫って、試し押しをしよう

「みんな、文様のアイデアは固まったかな。今日から、ゴム板を彫って、試し押しをしていきますよ。その前に、手ぬぐいの歴史や用途について確認しましょう」。先生はそう話し、手ぬぐいの説明が書かれたプリントを配布した。手ぬぐいは、江戸時代から庶民に親しまれるようになったこと、庶民が使っている様子が浮世絵にも描かれていること、当時は歌舞伎をモチーフにした文様の手ぬぐいが多く出回り人気を博したことなどを伝えた。また、手ぬぐいの包み方や頭への巻き方なども、実演を交えて説明していった。

そして、作業の説明に移る。手順は、おおまかに次の通りだ。

- 1 ワークシートに描いた文様を、トレーシングペーパーに写す。
- 2 トレーシングペーパーをゴム板に当て、転写する。
- 3 彫刻刀でゴム板を彫る。
- 4 ゴム板にインクを付け、布切れに試し押しをする。



作業工程や手ぬぐいの見本などを、板書でわかりやすく示した。

5 試し押しを見て、彫り足りないところを彫るなどして、調整する。

6 本番の手ぬぐいへ押し。

生徒たちは、すでに木版画を制作したことがあるため、比較的スムーズに、彫りの作業を進めていた。

彫りが終わり、試し押しに入ると、教室は一気ににぎやかになる。「インクはギュッと押し付けるのではなく、軽くポンポンとたたき感じで付けるときれいに色が付くよ」。生徒たちは指示どおりに、ゴム板にいろいろな色のインクを付け、布切れに押し付けていく。「どの色がいいかな」「赤やピンクだけでなく、ブルー系も入れたらどう?」「ここ、もう少し彫ったほうがきれいに見えるよ」……試

し押しを見せ合いながら、生徒どうしで相談し合う様子も見られる。

進度の早い生徒は、試し押しが終わり、本番に入ろうとしている。手ぬぐいは、34×90cmと大きいので、緊張して押すのをためらう生徒も。先生は、手ぬぐいと同じ大きさの細長い模造紙を用意し、「例えば、まっすぐに文様を押ししていきたい人は、この紙に直線を引いて、それを手ぬぐいの下に敷きましょう。そうすると、直線が透けて見えるから、それを頼りに押ししていくと失敗しないよ」。生徒が本番の手ぬぐいでも、きれいに押し付けていくよう、きめ細かな配慮も忘れない。

次時では、手ぬぐいを仕上げ、自分の作品について発表をする。

授業展開 (全6時間) 生徒の活動



指導計画

準備するもの

- 生徒 教科書、筆記具
- 教師 文様のパネル、手ぬぐい(文様の入った市販のもの)、プリント(文様の説明資料)、ワークシート、トレーシングペーパー、さらし布、ゴム板(5cm角)、布用インク(8色)、試し押し用の布切れ、彫刻刀、模造紙

学習目標

- 日本の伝統的な文様のよさに気づき、自分の思いを込めて、新たな文様を制作することができる。
- 自分の考えた文様を使って、工夫して構成を考え、手ぬぐいの柄を制作することができる。

評価規準

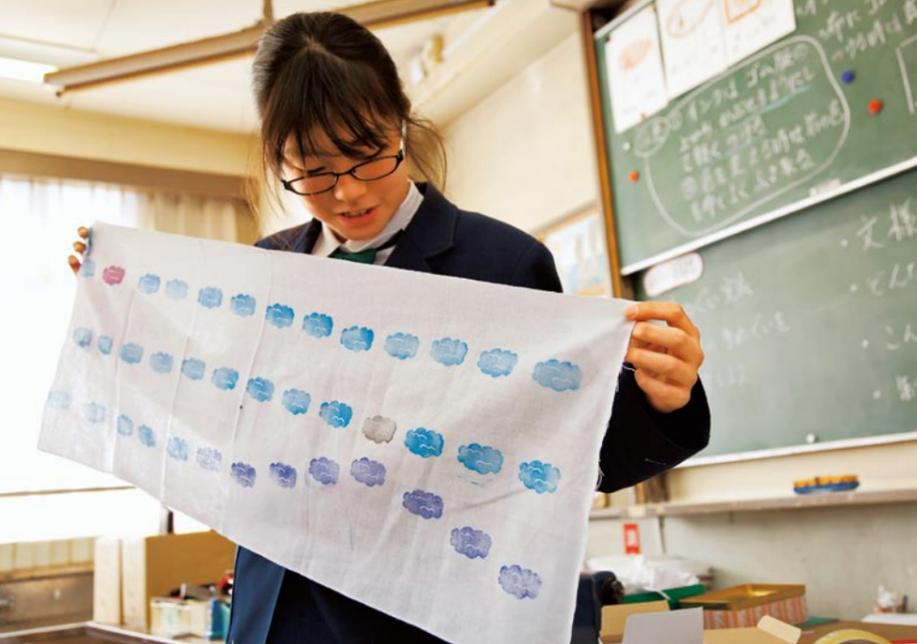
- 文様や手ぬぐいという日本の伝統文化に興味をもち、作品制作に取り組もうとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 自分の願いや思いを、工夫して形に表現している。(発想や構想の能力)
- 長方形である手ぬぐいの特徴を生かして、文様を効果的な配置で構成している。(発想や構想の能力)
- ゴム板を美しく彫り、形を生かしながら配色を工夫して、手ぬぐいの柄を制作している。(創造的な技能)
- 友達の発表を聞いて、作品のよさや思いを理解している。(鑑賞の能力)



A トレーシングペーパーを使って、文様をゴム板に転写。B 5cm角のゴム板に文様を彫っていく。C 彫りの具合を、友達と確認し合う。D 試し押しをして、どの色を使うか決める。E 試し押しを見ながら、彫り足りないところを削る。



特集 伝統の美から学ぶ



右／友達の発表を聞いて、よいところをワークシートにメモしていく。
左／Kさんは、「自分の願いを考えながら文様を押ししました」と発表。

が!」「いいね～」などと、どっと笑いが起き、教室が盛り上がる。

発表を聞いた生徒たちのメモを見つみると……

* * *

Kさんの発表を聞いて

- 文様の押し方に自分の思いが表れていて、いいなあと思いました。
- 雲が曲がって押ししてあるのはなぜだろうと思っていましたが、願いが込められていたんだと知って、さすがだなと思いました。

T君の発表を聞いて

- 星に「希望」という意味が込められていて、驚きました。
- 手ぬぐいが似合っていました！文様の色もカラフルでいいです。

* * *

多くの生徒が友達のよいところを見つけながら、発表を聞くことができていたようだ。

「みんな、自分の願いや思いを込めた文様を考え、すてきな手ぬぐいをつくることができました。でも、つくって終わりではありません。これから、ぜひ実際に使ってみてくださいね」。先生はそう話し、笑顔で授業を締めくくった。

発表の後、手ぬぐいをかぶるT君。「ほおかぶり」「現代かぶり」を披露。



文様に願いを込めて

「どんな願いを込めるかが、いちばん大事」。先生にそう言われた生徒たちは、文様にどのような願いを込め、手ぬぐいを制作していったのでしょうか。

Hさん リズム文



ダンスを習っていて、元気いっぱいのHさん。

音楽をちゃんと聴いて、リズムに乗ってダンスができますように。



最初は音符が一つだけの文様だったが、先生から「音符がいくつもあったほうが『リズム感』が出るのでは」とアドバイスを受ける。



楽しい音楽が聞こえてきそうな手ぬぐいが完成。「あえて余白を残しました。そのほうがバランスがよく、かわいいと思ったから」。

N君 元竹文



いつも作品づくりに一生懸命取り組むN君。

竹のように高く、すくすくと元気に成長していけますように。



試し押しを見て「竹に見えるかなあ」と不安に。竹をイメージして直線で押ししていくことに決めた。模造紙に線を引いて、手ぬぐいの下に敷く。



竹のようにすくすくと成長していきたいという願いを込めて、まっすぐに美しく押すことができた。仕上がりをみて大満足。

Y君 VICTORY文



サッカー部のY君。細かい作業が得意。

サッカーがうまくなって、試合で必ず勝てますように。



初めはサッカーボールのみの文様だったが、「勝ちたい」という願いを込めて、ボールの中に「VICTORY」のVを入れることにした。



ゴールネットのように、すき間なく丁寧に文様を押ししていく。Y君の手ぬぐいが完成したときには、周囲から大きな拍手が起こった。

第6時

手ぬぐいを仕上げ、発表しよう

「いよいよ手ぬぐいを仕上げ、自分の作品について発表してもらいます」。先生はそう話し、ワークシートを2枚配布した。1枚は、「文様名」「文様にどんな願いや思いを込めたか」「どんなふうに使ってみたいか」……など、発表する項目が書かれた発表原稿となるシート。もう1枚は、「友達の作品、いいところ発見!」と題した、発表を聞いて友達の作品のよいところをメモするシート。手ぬぐいが仕上がった生徒は、続々と発表原稿となるワークシートに記入を進めている。

そして、いよいよ発表の時間。一人ずつ前へ出て、手ぬぐいを胸の前で大きく広げ、発表していく。

Kさん(写真上)の文様名は「雲文」。

「雲のようにゆっくりでも確実に目標に向かっていけるように、という願いを込めました。ところどころに黒や赤の雲がありますが、これはスランプを表しています。もしスランプがあっても、変わらず進んでいけるようにという願いを表しています。そして、雲を全てまっすぐに押すのではなく、途中でカーブをつけて押ししました。これは、たまには寄り道してもいいよという意味です」。文様自体は、雲をかたどったとてもシンプルなものだ。しかし、Kさんは押し方に工夫を凝らして、自分の思いを見事に表現した。他の生徒からは「へえー!」「なるほど」など、感嘆の声が漏れた。

いっぽう、野球部のT君の発表は、教室に笑いを巻き起こした。T君は、当初なかなか文様のアイデアがまとまらず、制作が難航していた生徒だ。しかし、先生と相談しながら「野球上達文」という、星と野球のボールを組み合わせた文様を考えました。

「野球がうまくなりますようにという願いを込めて、野球のボールを星の形で囲んだ文様を考えました。星は僕の『希望』を表しています!」。元気なT君はそう言いながら、手ぬぐいをかぶって見せた。「さす

特集



伝統の美から学ぶ

願いよ、届け!



Nさん
「チョウチョ文」
「チョウのように高く羽ばたいていきますように」。中心に向かってチョウが羽ばたきように配置した。

W君
「部活がんばろう文」

「サッカー部での活動をがんばれますように」。ボールの中に「FIGHT」の文字を入れた文様。



Aさん
「努力生文」

「努力しながら、楽しく生きていきますように」。抽象的なイメージを組み合わせ文様をつくった。



S君
「亀文」
「健康で長生きできますように」。地道に進む亀と自分を重ね、少しずつ角度や色を変えて押した。

授業では、生徒のつくった手ぬぐいで、果物、瓶、本などを実際に包んだ。

特集
伝統の美から学ぶ



授業を終えて ——日本の伝統と文化の奥深さを感じてほしい

今回は、オリジナルの文様を押し、手ぬぐいをつくりました。文様を考えるだけでなく、手ぬぐいに押し、それを実際に使ってみることで、より文様に親しんでほしいと考えたからです。手ぬぐいに文様をどう配置するかも、子どもたちの願いや思いが伝わってきたので、おもしろかったですね。また、子どもたちが本番の手ぬぐいに押しときの緊張感も、とてもよかったと思います。

日本の伝統的な文様は、実に多種多様で、人々のさまざまな願いが込められているので、非常に奥が深く、教えがいがあります。時間が許せば、もっといろいろな文様を子どもたちに紹介してみたかった。これから学年が上がるごとに、「こんな文様もあるよ」と、子どもたちに教えていければと思っています。それから、夏休みなどを利用して、身近にある文様をもっと探させてみたいですね。



佐藤真理子
さとう・まりこ
長野県生まれ。大田区立南六郷中学校学年主任。女子美術大学芸術学部絵画科卒業。1992年、東京都教育研究員として「遊びの要素を取り入れた授業の工夫」と題し、研究発表を行う。98年には東京都立教育研究所の研究生として、論文「日本の伝統的な色彩のよさや美しさを味わい、表現に生かすことができる指導内容・方法の開発」を発表。

今後も折に触れ、日本の伝統と文化の奥深さを感じることでできる授業をしていきたいと思っています。(談)



光村図書中学校「美術」の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。

授業を参観して



上野行一
うえの・こういち
大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。著書に『まなごしの共有』（監修・淡交社）、『私の中の自由な美術』（光村図書）など。光村図書中学校・高等学校「美術」の著作者。

伝統と文化を尊重する態度を育てる〈学びのしかけ〉

伝統と文化を尊重する態度の育成は、教育基本法において新たに規定された教育の目標です。それを受けた今回の学習指導要領の改訂では、美術文化についての理解を深めることが教科の目標に加えられました。

佐藤先生の授業では、文様の学習を通して伝統と文化についての理解を深め、尊重する態度を養うことがねらいです。しかし、単に文様をデザインさせたり、文様についての知識を覚えさせたりするだけでは、理解は深まっても伝統と文化を尊重する態度の育成には不十分です。授業の中で生徒が主体的に文様についての情報を収集し、分析して活用する意図的な〈学びのしかけ〉を設定する必要があります。

では、佐藤先生はどのような〈学びのしかけ〉をしたのでしょうか。

授業の導入段階で、佐藤先生は教科書と自作のプリントを使い、文様には人々の願いや思いが込められていることを説明します。次に、文様は今も生活の中で使われており、身近なものから見つけようと伝えます。そして生徒たちに、「どのような願いや思いを込めるかがいちばん大事」と告げ、単に図柄を工夫するだけの表面的なデザインに陥らないように戒めました。

いきなり図柄を考え始めてしまうのは文様の授業に限ったことではありません。デザインの授業ではありがちなことです。しかしこの授業で

は、「願いや思いを形に込める」という文様の伝統と文化について学ぶことが重要なポイントですから、美しい図柄を考える活動が柱になっては学習のねらいが達成されません。

そこで佐藤先生は、授業の過程に「文様は今もどのように使われているか」「自分の願いや思いをどのような形にするか」「実際に使う手ぬぐいをつくる」という〈学びのしかけ〉を設定しました。

「文様は今もどのように使われているか」

生徒たちは、文様が生活小物などに使われていることを発見するとともに、それが図柄としての使用だけではなく、意味のあるものとして使われていることに気づきます。佐藤先生は、生徒に文様について関心をもたせるだけでなく、主体的に文様についての情報を収集し、伝統が現代に継承されていることに気づかせようとしたのです。

「自分の願いや思いをどのような形にするか」「実際に使う手ぬぐいをつくる」

自分の願いや思いを込めたオリジナルの文様と、それを使った手ぬぐいをつくること。これは収集した情報を分析して活用する活動に当たります。しかも、文様のデザインにとどまらず、実際に使える手ぬぐいをつくり、それを生活の中での文様の働きや意味を実感することでしょう。

このような〈学びのしかけ〉が生み出す一連の活動によって、伝統と文化を尊重する態度を育成するという学習のねらいは達成されるのです。

作家の肖像

第3回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Lee Ufan, 2008
Photograph by GH Christmas, courtesy Pace Gallery

1936- 李禹煥

リ・ウーファン

1936年韓国生まれ。ソウル大学校美術大学を中退後、56年に来日。日本大学文学部哲学専攻卒業。60年代後半より、「もの派」の中心的作家として活躍し、80年代より欧米でも積極的に作品を発表。主な個展に「李禹煥 余白の芸術」(横浜美術館 2005)や、「MARKING INFINITY」(ニューヨーク グッゲンハイム美術館 2011)など。著書に『新版 出会いを求めて』(美術出版社)、『余白の芸術』(みすず書房)など。

「究める」人

李さんとのつきあいは、もう40年以上になるでしょうか。彼は、パリと日本を拠点に生活しているのですが、日本に戻ってくると必ず電話をかけてきてくれます。そして、私たちは行きつけの喫茶店で待ち合わせて、いつもの席に座り、会わなかった間にあったことなどを、あれこれ話します。李さんは、とても多趣味な人で、話をしている飽きるどころか全くありません。クラシック音楽やワインなど、好きなものはとことん追究し、専門家もかなわないほどの知識をもっています。「究める」ということに、関心が強い人なのでしょう。

1993年、私が神奈川県立近代美術館に勤務していた頃に、李さんをお願いして、《照応》シリーズの個展を開催しました。そのとき、「空間をどう使うか」ということを、徹底的に追究していく彼の姿を、初めて目の当たりにしました。作品によって、空間の表情がどう変わるのかを敏感に察知し、例えば1点の絵を架ける高さなど、細かいことにも全神経を集中させていました。当時、私はその姿を見ながら、「究める」ことに熱中する作家と出会えた喜びをかみしめていました。

確かな存在感

李さんの作品は不思議なもので、一度見ただけでは、作品に「その見方じゃダメだよ」と言われている気がします。だから、私は何度も作品の前を行ったり来たりして、気持ちを引き締めて見たり、リラックスした状態で眺めたりしてみます。そう

やって、さまざまな角度から向き合わなければ、よさを感じ取ることができないと思うからです。

彼の作品には、確かな存在感があり、それによって、作品を含めた空間全体が生き生きと動き出します。時には、軽やかな音楽が聴こえたり、光を感じたり、深い闇を想像したりすることができます。私は当館の所蔵作品『線より』に向き合うと、ある種の音楽的なリズムが聴こえてくるような気がします。

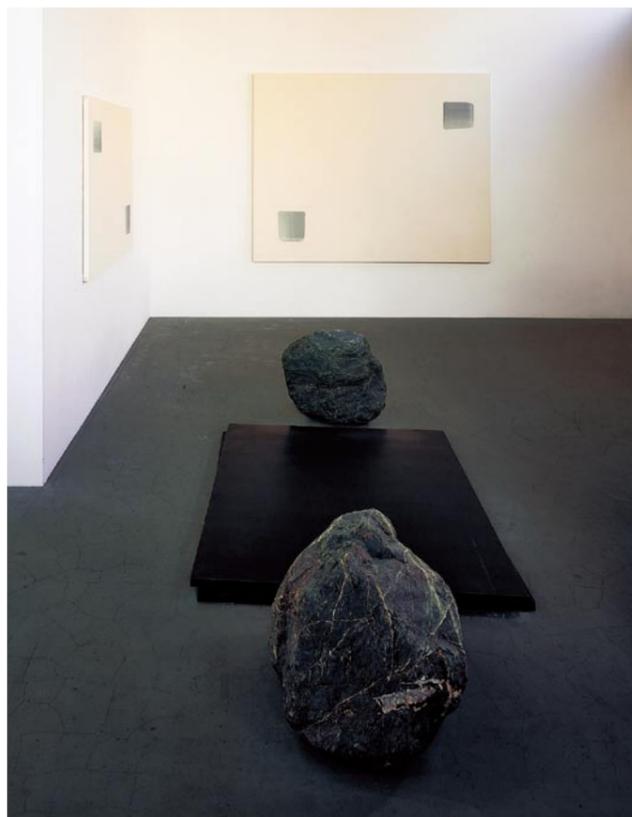
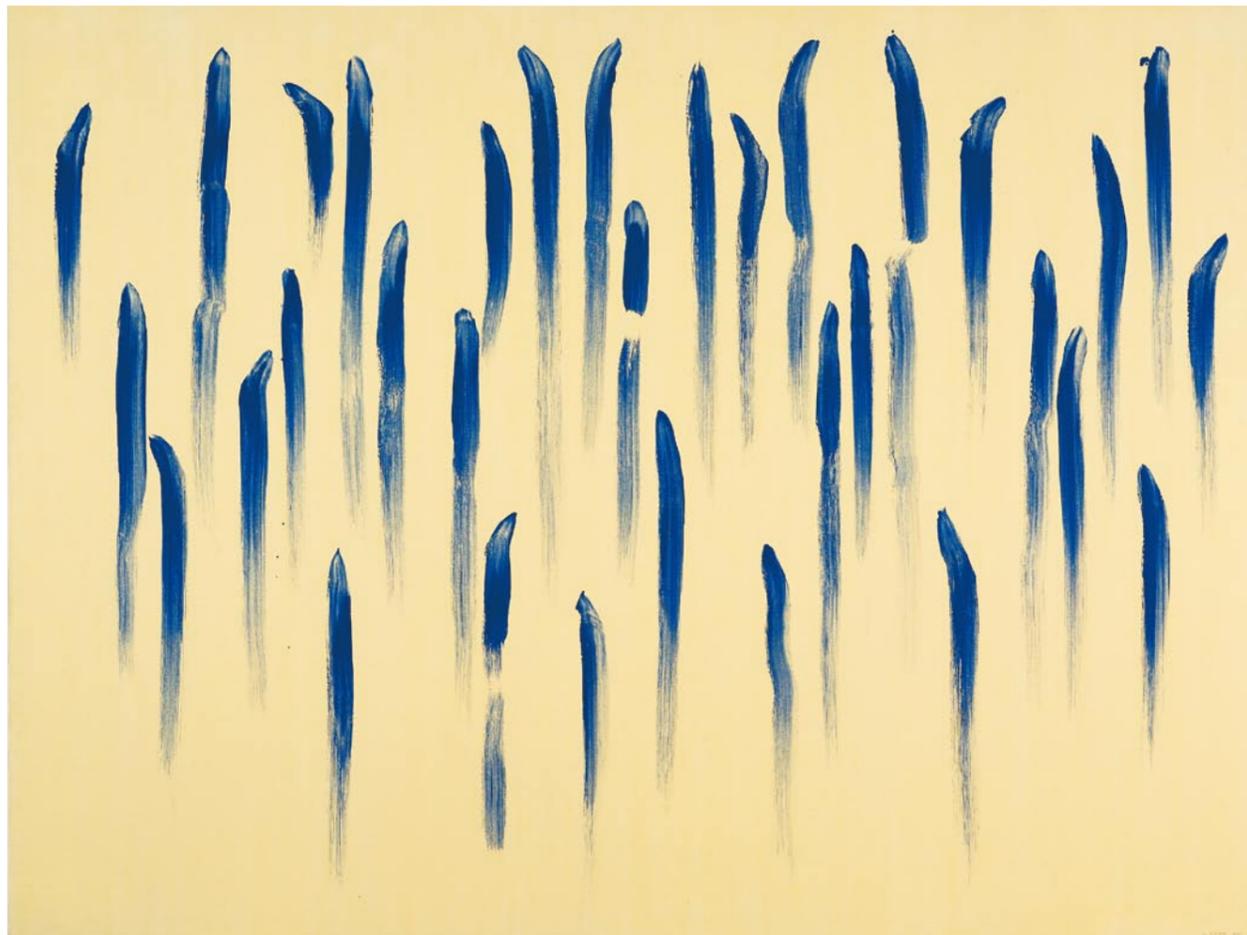
つながりを求める姿

点や線のみで構成された《点より》《線より》シリーズに始まり、さまざまな方向へ筆を走らせた《風より》《風と共に》、そして、余白に心地よい緊張感が漂う《照応》、見る者へ語りかけるような《対話》……と、李さんの作品は、年代とともに少しずつ変容しています。

私はそこに、韓国から日本へやってきた青年が、人との関わりを求め、そして出会う姿を重ねます。作品に描かれる点や線もまた、出会いを求めているように見えるからです。李さんは他者とのつながりをとても大事にする人ですから、来日したばかりの若い頃は、孤独に苦しんだことでしょう。しかし、そこから李さんの、自己形成と社会との関わりを深める思索が始まっていったのです。今後も、李さんがどのような作品を生み出していつてくれるのか、私は期待してやみません。(談)

酒井 忠康

さかい ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
平成24年度版光村図書中学校「美術」代表著者。



上／『線より』
キャンヴァス 岩絵具 218.5×290.5cm 1980年
世田谷美術館蔵

左下／展覧会の風景
『照応』と『関係項』が展示されている。
2002年、SCAI THE BATHHOUSE (撮影:安齋重男)

右下／『風と共に』
キャンヴァス 油 岩絵具 227×182cm 1983年
李禹煥美術館蔵(撮影:渡邊修)

子どもの世界をとらえる 第2回 将来を想像する自分

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方を紹介いただきます。

奥村 高明
 おくむら・たかあき
 聖徳大学児童学部教授。
 1958年宮崎県生まれ。
 小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
 文部科学省教科調査官として
 学習指導要領の作成に携わる。
 専門は図画工作・美術教育、
 鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。
 『子どもの絵の見方～子どもの世界を
 鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、
 『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』
 （美術出版社）など、著書多数。

見れば見るほど不思議な絵

展覧会や講演会で子どもの絵を選んだとき、よく聞かれるのが「なぜ、あの絵ですか」である。

申し訳ないが、正直わからない※1)。絵を見たときに真っ先に飛び込んでくるのは「引っかけた」とか「なんとなく」などの、理屈とはいえない感情や気持ちである。でも自分がそう思った理由は、絵の中にちゃんとある。

この絵の第一印象は「不思議」だ。私は右ページの1～4のように見ていった。そして、見れば見るほど不思議さは増していった。

学習過程と主題という観点から

この絵を、学習過程と主題の二つの観点からまとめてみよう。

学習過程からいえば、これは下絵、彫り、刷りの手順を踏んだドライポイントの授業だ。下絵のとき、いくつかの図版や自分の写真などを組み合わせ合わせたのだろう。それが不思議な空間を構成したのではないか。

主題からいえば、自分と魚には何かしらの意味がある。作者は将来、魚に関する仕事に就きたいのかもしれない。でも、それほど強い意志が感じられるわけでもない。何か考え込むような空気が流れている。いったい何を表したかったのだろう。

その後、作者とメールでやり取りをして、私の謎は全て解ける。私の「不思議」は、この子の画面の構成のプロセスと、そこに込められた思いが原因だった。以下は、作者からのメールを抜粋したものである。

**これは、いくつかの写真や絵を
紙に貼り、その上にプラスチック板
を重ねて彫るドライポイントです。**

3年生のときに制作しました。

授業のテーマは「自分」で、将来や趣味を描くものでした。まず全員がそれぞれ好きなポーズをとって写真を撮ります。私は机に肘をついてもたれている姿勢を撮りました。何かを考えたり、想像したりしている感じにしたかったからです。

私の趣味は釣りなので、用意したたくさんの魚の写真と自分の写真を見比べてみました。すると、魚が同じ方向を向いていることに気づき、「今の自分たちと同じだな……」と思いました。高校受験や就職など、将来の道はそれぞれ違うけど、夢という光に向かって前へ進む私たちは、同じ方向に向かって進む魚たちとよく似ていると感じました。

肘をついている自分が、それを眺めているように見せるために、水槽を描きました。水槽を一つの海とたとえば、その中で泳いでいる魚たちは中学校のときのクラスメイトや友人ということになります。描きたかったのは、同じ方向（将来）に向かって進む魚たち（自分たち）、楽しかった中学校生活です。だから魚や自分は特に丁寧に彫りました。

絵を見るという行為は、「観手」※2)と「作品」の相互行為である。このとき「観手」側に生まれる感情や気持ちは勝手なものではない。作品をつくりだしたその子の学習過程や思いから生まれている※3)。改めて、それを実感する作品だった。

※1 指導という観点からは「子どもの声」と「先生の声」がバランスよく聞こえてくる作品を選ぶようにしている。子ども：先生＝8：2くらいだろうか。

※2 鑑賞者を主体的に表すために長田謙一が創作した言葉。『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（奥村高明・長田謙一監訳 美術出版社）P37より

※3 社会的な背景や学校制度、授業の文脈などもある。



「将来を想像する自分」
 紙、ドライポイント
 38.2×27cm
 『美術2・3下』
 P18に掲載

私はこの絵を、次の1～4のように「描かれた事実」と「解釈」に分けて、見ていった。

1 事実 人物は水槽に寄りかかっているように描かれているが、この大きさの水槽に寄りかかるのには無理がある。人物の右手、左手の肘、胸の三点は同じ位置にあり、大きな「平面」が想定できる。
解釈 おそらく「平面」は大きな机で、そこに肘をついた人物を描いたのだろう。そして、そこに、水槽を合成したのだろう。そのため水槽が「平面」の下に伸びているように見えるのだろう。

2 事実 題名は「将来を想像する自分」。描かれたのは自分自身だが、大きな鏡がないと描けないポーズだ。
解釈 誰かに撮影させた自分の写真を見て描いたのではないか。

3 事実 水槽は投影図法の直方体で、砂や砂利が水槽の側面や底面と一致していない。海水性の魚を入れるのに必要な循環器やライト等がない。水に透明感がなく、水槽の向こう側が描かれていない。
解釈 観察して描いた水槽ではないだろう。何か象徴的な意味があるのではないか。

4 事実 イワシ、カツオ、イカ……一つ一つ細部まで描かれ、右向きで、一か所に集まっていくように配置されている。餌に群がって泳ぐ姿ではない。
解釈 事典等にある魚の図版を一つ一つはめ込むように描いたのだろう。海水性の魚を飼うほどのマニアではないが魚は好きで、魚を描くことやその方向性に何か思いがあるのではないか。

美術部へようこそ! ● 香川大学教育学部附属高松中学校

「アート県」とも呼ばれる香川県で、学校外のアートプロジェクトやワークショップにも精力的に取り組む美術部の様子をご紹介します。

美術で世の中を豊かに

明るい笑顔と挨拶で迎えてくれたのは、香川大学教育学部附属高松中学校美術部の、10名の部員たち。「元気に挨拶して自分を表現するように」と、顧問の金丸高士先生は日頃から彼らに言い聞かせている。そして、「美術の本質は、『創造的なことで世の中を豊かにする』ことだと思う。また、部活動なのだから、人間としての成長が第一。初対面の人にも感じがよくて、何かを表現できることを大事にしたい」と語る。

作品の制作に取り組む一方、学校外のプロジェクトの活動に積極的なことにも、その思いは表れている。2010年開催、瀬戸内国際芸術祭(※)の「高松うみあかりプロジェクト」もその一つ。「海の生き物」をテーマに、青森ねぶたの技法を用いた「うみあかりオブジェ」をつくるというものだ。大人の参加チームと肩を並べ、デザインから木と針金での成形、和紙の張り付けまで、1か月で完成させた。金丸先生は、「初めて地元で開催された芸術祭。よくわからないけど関わってみようと思いを決めた。出し合った案の中から選んだデザインをもとに、みんなで練り上げていった。参加するからには、作品の質にも妥協はしない。なんとか完成にこぎ着けた」と当時を振り返る。

※瀬戸内国際芸術祭
瀬戸内海の12の島と高松・宇野を会場に、3年に1度開催される現代アートの祭典。2010年に次いで、2013年の開催が第2回となる。

結果、「しゃちほこ」に想を得た愛らしいデザインの作品「Setouchi fish」は、同芸術祭総合ディレクター賞を受賞。思いがけない受賞は、喜びとともに大きな達成感を部員にもたらした。

厳しさも一つの経験

毎年12月に行う、幼児・小学生を対象としたワークショップの活動も目を引く。香川県立図書館と連携し、同館内でクリスマスカードなどを作り、絵本の読み聞かせを行う。

ちらしの作成、作るものや手順の検討、当日の進行など、企画・運営のほぼ全てを部員たちが担う。これを目当てに図書館を訪れる子がいるほど人気のイベントだ。「人前で話すのが苦手だったが、2年目、ようやく緊張しなくなった。小さい子の自由さには驚かされる」と話すのは2年生の部員。年下の子ともたちと接する機会は刺激になっている。

制作と学校外での取り組みの、バランスを考えて活動をする。関わる全ての人の要求に、高いレベルで応えるという、プロジェクト活動の厳しさを挙げながらも、「でも、それも含めて経験。制作の厳しさを味わうことも大切」と金丸先生は語る。今年の芸術祭プロジェクトには、企画から携わる。附属高松中美術部は、香川の環境を存分に生かし、世の中を豊かにする活動を楽しんでいる。



今年、女木島で行われる「オニノコ瓦プロジェクト」に参加する。自作の鬼瓦を掲げる部員たち。



左/暑さに悩まされながらも、1か月という短期間で制作した「Setouchi fish」。



右/ワークショップではサンタの帽子をかぶり、型紙を使ったクリスマスカードの作り方を教える。

教室を飛びだして

wah document (ワウドキュメント)

学校外で行われる、子どもを対象とした美術のワークショップやプロジェクトを紹介するコーナーです。今回は、アイデアを即興的に実行するワークショップを行う「wah document」の活動をお伝えします。

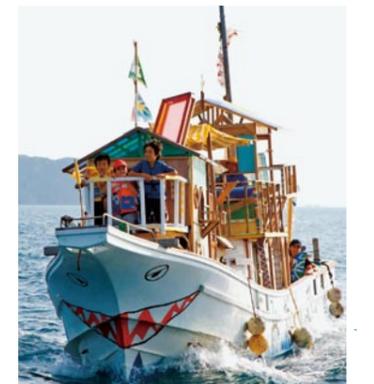


術を実感した瞬間に発せられる、喉から思わず出たような声「wah (ワウ)」を冠したユニット、wah document。活動するのは南川憲二さんと増井宏文さんの二人。その内容は、各地に赴き、一般募集した大人や子どもの参加者とその場で出し合ったアイデア、街で集めたアイデアを、即興的に実行するというもの。彼らもメンバーとして参加する。

「大学卒業後、小学校の図工の講師に。自分が表現したいことを見失っていた時期だった。ある日、子どもが10分休憩の間に、思いつきで遊びをつくる姿を見て、『表現の動機って、瞬間的に手に入れられるんだ』と思った。それがこの活動を考えたきっかけ」と南川さんは語る。小学校の運動場に風呂をつくる、一軒家を人力で持ち上げるなど、どんなアイデアでも本気で実行する。目的は、アイデアが形になる、全員が身震いするような瞬間を共有すること。参加者を募るのは、自分たちにはないアイデアを求めるためだという。「特に、子どもと活動するとき

は思いもよらないアイデアが出るからおもしろい。2010年の、小・中学生とのプロジェクトは忘れられない。漁船を調達・改造し、無人島へ行って帰ってきた。幾多のトラブルを乗り越え、1年以上かけてやり遂げた。『人生、本気でやればなんでもできる』という名言を残した子がいた」と南川さん。

今後は少しスタイルを変え、これまでに体験した「wah」の瞬間を統合し、表現や造形を突き詰めていく活動をメインにするそうだ。



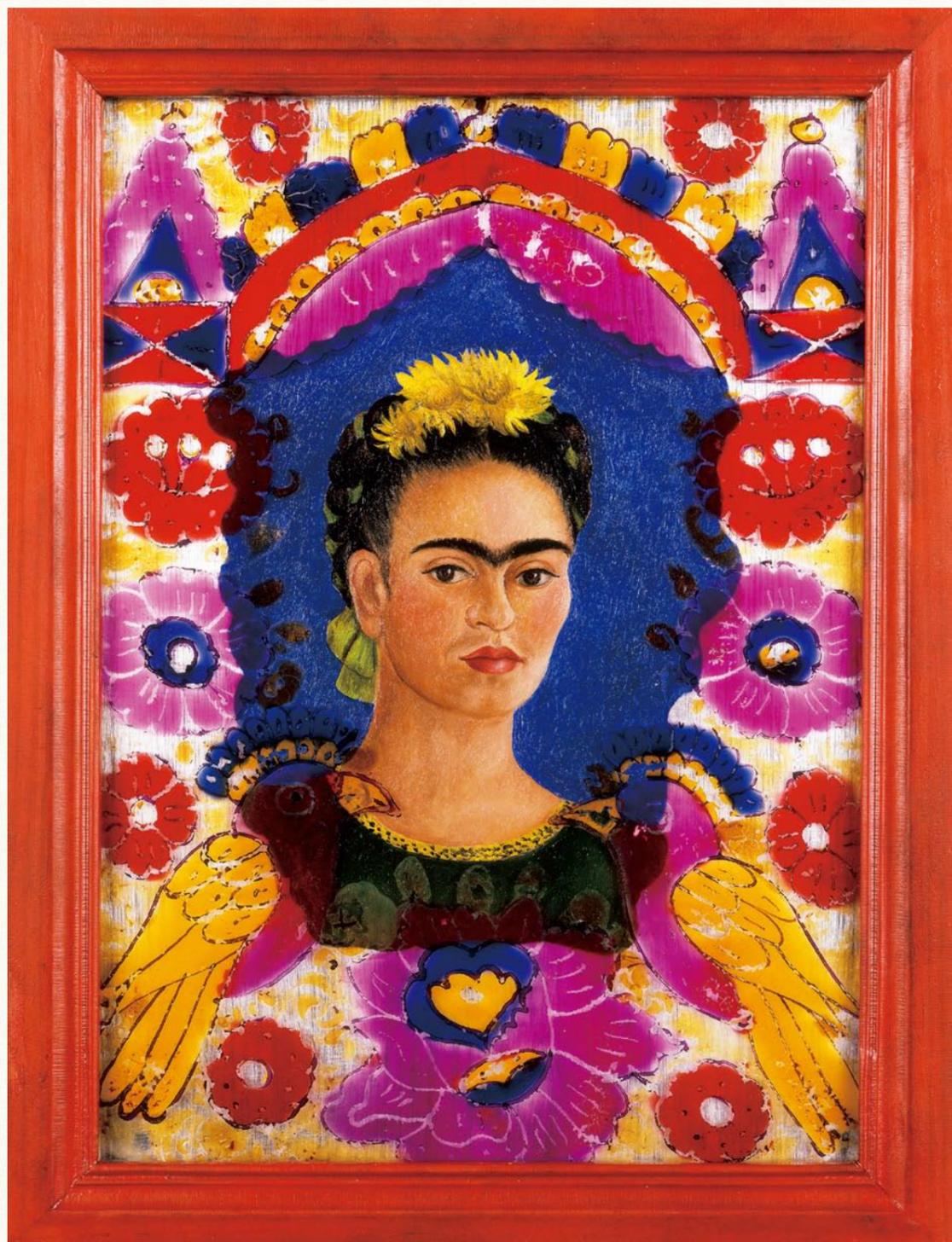
無人島に行くプロジェクトでつくった船、「はみだし丸」。漁船を調達し、甲板部分を自分たちで改造して完成させた。

<http://wah-document.com>

放課後

第3回

A R T



第 3 回
自画像

フリーダ・カーロ

アルミニウム、ガラス、油彩 28.5×20.5cm 1938年
ボンビドーセンター蔵（フランス）

©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais /
Jean-Claude Planchet / distributed by AMF-DNPartcom

あなたは、あなたでいい。

メキシコシティ近郊にあるフリーダ・カーロの生家に行ったことがある。鮮やかなコバルトブルーの外壁をもつこの屋敷は「青い家」と呼ばれ、1907年に彼女はここで生まれ、47歳の若さで亡くなった。

晩年に彼女が使っていたというベッドがあった。そのベッドの小ささに驚いた。こんな小さな人だったのか……と。寝たきりになった彼女はベッドの天井に特別製の画架を取りつけ、絵を描いたという。ベッドの前に立ったとき、彼女があるインタビューで「一人の時間が多から自画像を描くのだ」と語っていたことを思い出した。

フリーダの人生は、世間一般の常識に当てはめてしまえば「不幸な人生」だろう。幼少期から足の病気を患い、さらに少女時代にバスの事故に遭う。生死の境を彷徨い、恋人とは離別。

絶望と孤独が彼女を絵に向かわせる。創作とは悲しいものだ。多くの表現者は精神的な混乱の中から優れた作品を生み出す。彼女もそうだった。絵が認められ画家として成功したフリーダはたくさんの著名人たちと交流をもち、恋愛もするが、他者との交流によって彼女が孤独から救われたことはなかった。

描かれている自画像は、いつも「もう一人のフリーダ・カーロ」である。本当の自分、隠している自分、内面の叫び、欲望、絶望、希望……それを自画像として描いた。彼女の苦しみは人間がもつ普遍的な苦悩であり、だから彼女の自画像は見る者を惹きつけてしまう。

描かれているのは彼女であると同時に、見ている私だから。

初めてこの絵を見た人は「この眉毛が繋がっている風変りな自画像はなんだろうか？」と思うだろう。

実物のフリーダの眉毛はこんなに濃くはない。フリーダは時々うっすらと口ひげを描いたりしてことさら自分の体毛の濃さを強調する。当時であっても西洋の美の基準は「白い美しい肌」であった。でもフリーダはありのままの自分を堂々とさらけ出して見せた。華やかな民族衣装、つながった眉毛、誇らしげに自分であることを見せつけ誇示する彼女の強さは、新しい時代の女性像として称賛された。

でも、彼女の強さは彼女の弱さの現れであり、いったい強いことと弱いことはどう違うのかわからなくなる。彼女はすべての弱みをさらけ出して受け入れた。身体の障害も自分のコンプレックスも……。それは作品の強さとなり、彼女の人生を支え続けたのだ。この自画像を見ていると、弱みをもたぬ強さなど、存在しないのかもしれない……と思う。

田口ランディ
たぐちらんてい

作家。1959年東京都生まれ。
人間の心の問題をテーマに、幅広く執筆活動を展開。
『ドリームタイム』（文藝春秋）には、フリーダ美術展で二つの人格をもつ謎の女に会うという短編小説が掲載されている。
また、エッセイ『オラ！メヒコ』（AKIRAとの共著・角川書店）では、メキシコのフリーダ・カーロ美術館を訪れたエピソードを紹介。
『コンセント』『アンテナ』『サンカーラ この世の断片をたぐり寄せて』（以上新潮社）など著書多数。